

色々威胴丸兜・大袖付一領（肩萌黄）
色々威胴丸兜・大袖付一領（肩紫）

【所在地】鹿児島市城山町7-2 県歴史・美術センター黎明館
（霧島市隼人町 鹿児島神宮所有）

【種別】国指定有形文化財（工芸品）

【指定年月日】昭和28年3月31日



肩萌黄（県歴史・美術センター黎明館寄託中） 肩紫（県歴史・美術センター黎明館寄託中）

この2領の胴丸^{どうまる}は、永禄元（1558）年、島津貴久^{たかひさ}が鹿児島神宮に寄進したものである。精巧な盛上げ本小札^{もりあげほんこざね}を、1領は紅、白、萌黄の組糸^{もえぎ}で威し、もう1領は白、紅、紫の組糸^{おど}で威したほとんど同形式の美しい胴丸で、室町時代末期の作である。兜^{かぶと}は、三十二間総覆輪筋兜^{さんじふにまんとくりんすじかぶと}で、当時もっとも流行した阿古陀形^{あこたなりしころ}、鞆^{かまど}は三段笠鞆^{さんせんかさかまど}である。鍬形台中央^{くわがただい}に三鈷柄^{さんこつか}を設けて利剣^{りけん}を立て、三鍬形^{みつくわがた}の形をとる等、当時の様子を知る貴重なものとされている。また、南北朝時代から室町時代に作られた胴丸遺品の中で、これらの胴丸のように兜や大袖を備えているものは少なく、胴丸に付く兜や大袖の形式を知る上からも重要なものである。

<参考> 甲冑^{かっちゆう}の用語（1）

- 大袖 古くは単に袖と呼ばれていたが、広袖、壺袖、当世袖のようなものが出現するようになると、古い形式の大型の袖のみを指すようになった。札板は6～7段あり、大鎧、胴丸、腹巻に付ける。
- 小札 鉄板や牛皮を小さく短冊状に切り、上辺を斜めにそいだもので、普通は13個の穴を2列にあけてあり、これを革紐や組紐でつないで甲冑の主な部分を形づくる。小札の大きさは平安時代のものが最も大きく、時代と共に小さくなり、本小札に対して簡略化したものもある。
- 阿古陀形 主に室町時代後期の筋兜に見られ、兜の前後のふくらみが強くなり、その形が当時南方から輸入され珍重された「あこた瓜」に似ているところから名付けられたと言われる。